

敬愛される「国王像」の創出

——現タイ国王プーミポンと宮中組織による戦略とその効果——

平成 24 年編入学
派遣先国：タイ王国
櫻田 智恵

キーワード：タイ、王制、地方行幸、御真影、視覚的支配

対象とする問題の概要（～400 字）

東南アジア大陸部に位置するタイ王国では、現国王やその家族の写真が全国各地の商業施設、屋外、学校の教室など至る所に掲揚されている。またテレビニュースでも王族の姿を目にしない日はない。今日タイに住む人々が、王室のイメージから逃れることは事実上ほぼ不可能である。このように現タイ国王プーミポン（在位 1946 年～）は、視覚的支配によって国民の尊敬と愛慕を集め、それを土台として強大な政治的権威を確立してきたと考えられる。

視覚的支配とは、支配者が「国民に姿を見せること」によってその支配を強化することである。それは、支配者の威光や格式を人々に視覚的に見せる、つまり支配者の「イメージ」を確立することによって統治する技術を指す [T.Fujitani 1994: 原 2011]。

国王は「国民に姿を見せる」「新しい国王」として、国民の敬愛を獲得したと言われており [NIO 2008]、これは視覚的支配が効果的に作用してきたことを意味している。



写真 1 巷に溢れる国王の御真影

研究目的（～400 字）

それにも関わらず、視覚的支配の実態そのものについては等閑視されてきた。それは先行研究の多くが国王と政治の関係に注目し、一方で国王と国民の関係については看過されてきたためである。

そこで本研究では、プーミポン国王の視覚的支配の実態を通時的に明らかにする。ここから、強大な政治的権威を持つ「タイ式」立憲君主としてのプーミポン国王を許容する国民感情が、その視覚的支配によって形成されてきたことを実証することを目指す。本研究では主に、視覚的支配の統治技術として、①地方行幸や②御真影などの政治的装置、及びそれを追体験できる媒体としての③メディアという 3 点に着眼している。

今回の調査は、①地方行幸について、現在終えている分析をもとに研究成果報告を行い、タイ人研究者からフィードバックを貰うこと、及び②御真影の流布について、特に学校教育における使用関す

る資料の所在を明らかにすることを目的として行った。

フィールドワークから得られた知見について（～800字）

本調査の目的は、大きく分けて研究成果報告と新しい資料の収集の2点であった。以下に、それぞれの成果について詳述する。



写真2 チュラーロンコーン大学での研究成果報告の様子

1. 地方行幸に関する研究成果報告の内容と成果

タイ最高峰の研究機関であるチュラーロンコーン大学の文学部において、タイ語で研究成果報告を行い、教授陣や院生などと議論した。

地方行幸は、特に1960年代後半からプーミポン国王の中心的な公務であった。報告者は、君主の地方行幸が果たした役割について多くの分析がなされている日本史研究の手法を援用し、タイの地方行幸を分析している。今回の報告では、日本史研究の手法について説明した後、国王とその家族の地方行幸啓についてまとめたデータを提示し、そこから「国王のイメージ形成」手法の変遷過程に関する仮説を提唱した。先生方

からは仮説に対する意見の他、今後の調査に対する助言や新しい研究動向など、興味深い意見を多く貰うことができた。

また、この研究成果報告内容について、チェンマイ大学人文学部の先生方とも議論を行い、ここから共著執筆が決定するなどの成果があった。

2. マス・メディア、及び地方行幸に関する資料の収集

まず、チェンマイ大学に保管されている、チェンマイ県の地方紙（Chiang Mai News）のマイクロフィルム・データの借用に関して、チェンマイ大学副学長 Rome Chiranukrom 准教授と面談を行った。マイクロフィルムの数が膨大であることや、京都大学には東南アジアに関心のある学生・研究者が多いことから、報告者個人とのやり取りではなく、大学と大学のやり取りにしてはどうかと提案を受けた。本件に関しては、現在話し合いを進めている段階である。

次に、チェンマイ県庁にて、奉迎担当官の Somsak Onon 氏にインタビューを行った。今回は3度目のインタビューである。Onon 氏は奉迎方法に関する著作もある、王族の奉迎専門家である。チェンマイにおける奉迎方法の変遷と、各人の相違点などについてインタビューを行った。

今後の展開・反省点（～400字）

今回の派遣では、特に調査対象地域であるタイの研究者との交流や意見交換を積極的に行うことができ、具体的に共同執筆の依頼を受けることもできた。自身の研究の発展に大変有益であったと感じ



写真3 チェンマイ大学副学長と



写真4 ChiangMai 県庁にて Onon 氏と

ている。

また今回は、研究報告だけでなく、他大学や企業でのセミナーなども行い、今後のセミナー講師の依頼などを受けることにつながった。研究職を目指す者として、研究成果をいかに社会に還元するかを考える機会になった。

しかしながら、目標としていた御真影に関する資料の収集は、事前調査の不足もあり、完了することができなかった。今後の調査では、御真影に関する法令やその設置数、学校への下賜の現状などについて積極的に調査を行っていきたいと考えている。

【引用文献】

フジタニ, タカシ. 1994. 『天皇のページェント：近代日本の歴史民族誌から』. 米山リサ 訳. NHK 出版.

原武史. 2011. 『増補版 可視化された帝国』. みすず書房.